

令和5年度全国剣道指導者研修会（東日本ブロック・三重県）



「木刀による授業例」の様子

令和5年度全国剣道指導者研修会・東日本ブロック（主催＝日本武道館、全日本剣道連盟、全日本学校剣道連盟、後援＝スポーツ庁、三重県教育委員会、三重県剣道連盟、主管＝三重県学校剣道連盟）は、10月13日から15日までの2泊3日、三重県桑名市のヤマモリ体育館（桑名市体育館）において、講師10名、参加者46名の出席を得て実施した。

本事業は、平成22年度から令和元年度までの10年間、全国9ブロックのうち、毎年5ブロックで実施し、全国をまわり約3,000名の参加を得た。令和2年度からは全国を東西に分けた2ブロック開催の予定だったが、コロナ禍の影響を受け中止が続き、昨年度は人数制限を設けて3年ぶりに対面で開催した。本年度は制限を設けずに2ブロックで開催を予定し、今回、本年度初めての開催となった（西日本ブロックは11月に広島県・福山市にて開催予定）。

■1日目（10月13日）

開講式では、はじめに主催者挨拶を和田健日本武道館振興課長が、「中学校武道必修化の完全実施から11年が経ち、授業を受けた生徒たちも社会に出て活躍しております。本研修会はその前から実施しておりますが、その間、本研修会の講師陣が第一線で試行錯誤を重ねて学校授業の指導法を研究してまいりました。本研修会はそのエッセンスが詰まった内容となっております。3日間、1つでも多くものを持ち帰って、授業に活かしていただければと思います」と述べた。続いて、網代忠宏全日本剣道連盟会長が、「三重県では11年前に本研修会を実施しましたが、台風

の渦中でした。今回は天候に恵まれました。教育の一番の課題は人づくり、生きる力を養うことです。子どもたちが楽しく授業を受けられるよう本研修で学んでいただきたい。本研修ではそのエキスを与えます。ぜひ持ち帰って人づくりに専念していただきたい。皆様の活躍に期待します」と述べた。

続く、講義1「新型コロナウイルス感染症拡大防止に留意した中学校における剣道授業」では、軽米満世講師が、全日本剣道連盟のガイドラインなどに基づき、コロナ対策や熱中症対策、また、その他「安心・安全に心掛けること」などを講じた授業を実施するため、資料を説明し、そして実際の授業の様子を映像で見せながら、明日以降の本研修会の実技研修の内容に沿う形で講義を行った。



講義1の様子

講義2「中学校保健体育における剣道学習の考え方」では、藤田弘美講師と岩脇司講師が講義を行い、まず、藤田講師から、①「中学校における剣道授業の現状」について説明し、授業時間の減少によって、生徒が楽しいと感じる攻防まで行きつかないことや、②「学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた剣道学習の

進め方」では、導入の工夫、ペア学習、思考力・判断力・表現力等のトライ&エラー、教材・教具の工夫の説明、③「剣道学習における主体的・対話的で深い学びの展開例」では、ICT 活用についてスポーツ庁のホームページを紹介し、また、資料を基に ICT を使うことが目的になってはならず、活用のさせ方を明確にし、ICT はあくまでも学習目標を達成させるためのツールであることを説き、実際の ICT 活用については、その様子を映像で見せるなどして岩脇講師が解説した。

■2日目（10月14日）

実技 1-1「剣道授業における楽しい動機付け」では、はじめに軽米講師が①「剣道の歴史と特性」について説明し、次に、山田博子講師と有田祐二講師による②「武道的素養を培う遊びの体験」の実技研修を行い、手のひら攻防のジャンケンゲームや、手ぬぐいゲーム、大声を出すためのパートナーを探せ、新聞切り、新聞球打ちなど、ほぐし運動として剣道の特性を楽しんで感じとらせるための学習方法を実践した。



その後の実技 1-2 では、軽米講師による「剣道に必要な動きづくり」の実技研修を行い、なぜこの準備運動をするのか、剣道の、どの基本動作につながるのかなど、ねらいを明確にすること、また、すり足や踏み込み足の練習を用いることで、ウォーミングアップにもなり、運動量の確保や冬の授業の寒さ対策にもつながると説明した。

続いて、実技 2「剣道具のない授業例」では、まず①「礼法」を、神崎浩講師と岩脇講師が担当し、礼（禮）の意味や考え方を説明し、礼法の実践指導を行った。②「木刀による授業例」では、井上孝講師と岩脇講師が担当し、全剣連制定の「木刀による剣道基本技稽古法」の中から、中学校授業用として基本 1～5 を教材

として示範しながら一斉に指導を行った。その後、③「『木刀による剣道基本技稽古法』のグループ学習」として、山田講師が、生徒がつまずきそうな技をどのように解決するかなど、グループでアイデアを出し合い学習する方法を説明し、班ごとに発表を行った。



午後からの実技 3「剣道具のない授業例」では、花澤博夫講師と神崎講師が担当し、①「竹刀による授業例」を指導した。まず、竹刀の各部位を確認し、授業では最初に必ず竹刀に破損などがいないか、安全確認を徹底して行うことを説明し、次に基本的な竹刀の握り方や目付、構え、体さばき、足さばき、素振り、打ち方、打たせ方、間合の理解、基本打突、残心など、段階的な指導例を説明しながら実践した。

続いて、②「音楽を活用した授業例」を、佐藤義則講師と有田講師が担当し、リズム剣道を紹介した。音楽に合わせて基本となる技を行い、反復練習することによって基本を身に付け、特にリズムに乗って打つ楽しさを味わうことがねらいであること、また、巡回指導がしやすいことを説明。また、常に対人を意識して行うことを指導し、単独、ペア、グループでの学習を行い、最後にグループごとに考えたリズム剣道の発表を行った。



続く実技 4「剣道具のある授業例(1)」では、藤田講師が、①「剣道具の段階的着装」を、有田講師が、

②「基本となる技の段階的な指導—相手の動きに応じた基本動作—」を、佐藤講師（神崎、井上両講師が補助）が、③「ごく簡単な試合 1 判定試合（正面・小手・胴）」をそれぞれ指導した。判定試合によって 1 本となる有効打突を生徒が意識するようになり、また、試合後に皆で話し合い、できたこと・できなかったことを振り返り、深い学びにもつながると説明。



判定試合での話し合いの様子

実技 5「剣道具のある授業例(2)」では、①「応じ技（抜き技：面抜き胴）」と、②「ごく簡単な試合 2・応じ技による判定試合（面抜き胴による 3 本勝負）」を井上講師（佐藤講師が補助）が、③「応じ技を用いた約束練習」を有田講師が、④「自由練習」を藤田講師が指導し、⑤「簡易な試合（ポイント制）」を佐藤講師が紹介し、特に判定試合の際、中学生がやりそうなことを演じて行うなど、楽しく取り組んでいた。

実技研修最後の⑥「剣道具の結束」は、井上講師が説明し、全員で実践した。

2 日目の最後は、藤田講師指導の下、「3 つの資質・能力をバランスよく育む剣道学習を目指して」をテーマとして、班別で研究協議を行った。キーワードとして、「ICT の活用」「主体的・対話的で深い学び（方法）」「個別最適な学び・協働的な学び（形態）」を挙げ、剣道の授業づくりにおける課題や工夫点を話し合った。なお、班別協議の結果について 3 日目の質疑応答で発表し、講師陣に回答を求めることとした。



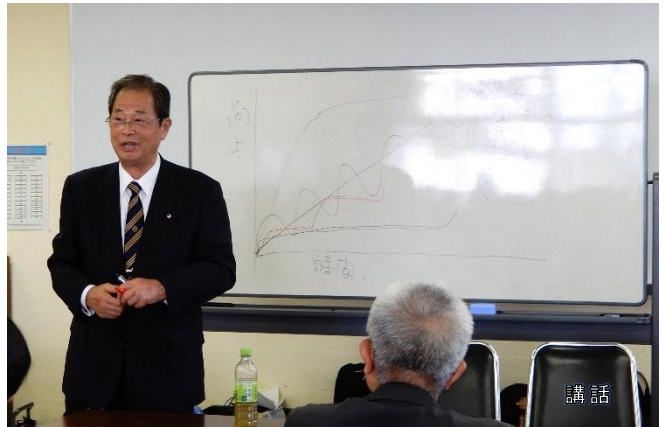
研究協議の様子

■3 日目（10 月 15 日）

講義 3 の「安全指導」を神崎講師が担当し、資料を基に講義を行った。特に、事故を未然に防ぎ、学習効果を上げるためにも、安全で清潔な学習の場（床）の確保や剣道具の点検、保守管理といった安全管理が重要であることを説明。また、改めて熱中症予防についても言及し、注意喚起した。

続く講義 4「体罰・暴言によらない指導を目指して」は、花澤講師が担当し、まず、資料として、事例 1・2 を配布し、ペアで先生と生徒役に分かれ実習を行った後、その結果について発表し合った。また、資料を説明し、最後に、「指導者の意識を変えること、体罰やハラスメント行為はそれまでの積み重ねてきたキャリアを全て失うことになる。怒りの感情を上手く処理するのが賢明な指導者。現場は大変ですが先生方の益々のご活躍に期待します」と述べた。

続いて、網代講師が教員生活 50 年の経験談を交え子どもの 5 つのタイプの成長・習得の仕方について講話を行った。人の成長の仕方は様々であり、特に今できなくてもコツコツと努力を重ねて後に実力が上昇する掉尾型の成長があることから、直ぐにできなくても叱らずに見守ることが重要であると説いた。最後に、「指導者は怒ってはいけない。子どもたちに包容力を持って接してほしい。言葉一つで素直な心も曲がってしまう。教育者としてそうならないよう頑張っていたきたい」と締めくくった。



最後に、昨日の研究協議による課題の発表と全体を通しての質疑応答を行い、「剣道授業と部活動での初心者への指導の違い」や、「特別な配慮を必要とする生徒の指導について」などの質問に対し、講師陣が回答した。

閉講式では、修了証の授与の後、講師を代表して佐藤講師が講評を行い、主催者挨拶を網代全日本剣道連盟会長が述べ、3 日間の全日程を終了した。